

ステップポイント取得数発表



年々増加の一途を辿るピティナ・ピアノステップ。今年も参加人数述べ1万人を突破した。この度2001年度ステップポイント取得者一覧を、インターネット上で発表する。ステップポイントとは、ステップに参加する毎に1ステージにつき1ポイントずつ加算されるシステム。継続的にピアノ学習を続けると、5回、10回、15回、20回と定期的に「継続表彰」の対象となり、賞状と記念品が授与される。ご自分のポイントを確認して、来季への目標を設定してはいかがでしょうか。



2001年度紀要論文及び研究レポート採用者が決定



2001年度紀要論文ならびに研究レポートを募集、紀要選考委員会にて選考した結果、以下の方々が採用された。ここにその論文要旨を御紹介する。

<紀要論文>

●渡邊さらさ/バルトークの民謡編曲作品における演奏研究—「ハンガリー農民の歌による即興曲」Op.20を中心に

<研究レポート>

●市川雅己/「プロコフィエフ ピアノ・ソナタ第7番 変ロ長調 作品83の研究」

●伊藤庸子/「タッチを意識したピアノ指導～弱音のタッチに留意して～」

●深井尚子/「ピアノ教育の現状への一提言」

紀要研究論文要旨

バルトークの民謡編曲作品における演奏研究—「ハンガリー農民の歌による即興曲」Op.20を中心に

渡邊さらさ

バルトークは、20世紀近代音楽の発展に、民族的音楽語法の開拓者として大きな影響を与えた。その独自の音楽語法—中心軸システム、黄金分割—等は今日多くの音楽学者達に論ぜられている。しかし当のバルトークは自身の作品について多くを語りたがらず、自らの作品は「本能的にして感覚的なもの」であり、「私はそう感じ、そう書いた」だけだと主張していた。そうした主張に、バルトークが影響を受けた民謡の研究を通じて接近しようとしたのが、当論文である。

「ハンガリー農民の歌による即興曲」Op.20は、民謡の編曲や、民謡を主題に使うことの多かった創作活動前半期（1920年まで）の集大成的、総括的作品である。

第1章では、Op.20で主題に使った8曲の民謡を、バルトークが著した民謡研究の理論書を通して考察した。この理論書ではそれまでに採集してきた民謡の一部を、個々の特徴（音構成、曲構造、リズムの要素）から、古い様式の民謡、統一性のない民謡、新しい民謡、と選別している。この理論書から、Op.20の8曲の民謡は、7曲の古い様式の民謡と1曲の統一性のない民謡である事がわかった。そして「すでに埋もれてしまった古い遺産の中から"新しいもの"を発見したいと願っている」と述べたバルトークが古い様式の民謡を音楽価値の高いもの

だと評価した事が改めて確認できた。

第2章では、民謡の記譜の際に記録された歌詞と曲想との関連を考察した。

「ハンガリー民謡の歌詞には音楽と違って内容的にあまり見るべきものはない」という演奏家もいる。しかし作品をみていくと、その音構成、フレーズ、ダイナミクスには、歌詞からの影響であろうと思われる箇所が数多くみられた。

2001年度紀要論文・研究レポート採用決定者



渡邊さらささん



伊藤庸子さん



市川雅己さん



深井尚子さん

研究レポート要旨

●「プロコフィエフ：ピアノ、ソナタ
第7番変ロ短調長調 作品83の研究」

市川 雅己

ロシアの作曲家セルゲイ・セルゲエヴィチ・プロコフィエフ（1891～1953）は、生涯に9曲のピアノ、ソナタを残しているが、それらの作品は20世紀のピアノ、ソナタの最も重要なレパートリーのひとつとして存在している。9曲のピアノソナタはそれぞれ「第1期」若い時期に書かれた第1、2、3、4番、「第2期」第5番、「第3期」第6番、7、8番、「第4期」第9番と大きく4つの時期に分類することができ、各時期での音楽様式を人生と共に表現している。

特に「第3期」に書かれた第6、7、8番の3曲は、彼の創作の頂点の時期に書かれ、第2次世界大戦中に同時に作曲されたために《戦争ソナタ》と呼ばれ、彼のピアノ独奏曲の中でも傑作群として知られている。いずれも高度な技術と譜秋音楽的内容を持っているが、3曲のソナタは当時のソヴィエトの深刻な時代や社会環境を現しており、それぞれちがった個性を持っている。そこには、第6番よりも、第7番、第8番へと次第にピアノスティックな音の響きから、音の単純化と簡素化を進めていく晩年への流れがみえる。

《ピアノ、ソナタ第7番》は、スターリングラードの攻防戦の最中に書かれ、冒頭からの不安定な音描写やきわめてドラマティックに展開する楽想において、3曲の《戦争ソナタ》の中でも最も社会的空気を現している作品と言える。また、リズムを主体とする打楽器的要素を多用していることから、第1楽章を中心に全体が無調的に書かれていることも大きな特徴といえよう。そして、数々のモチーフによって全体が組立られているうえに、アレグロ部分とアンダンティーノ部分の楽想的対比をもつ第1楽章、両端の楽章と大きく対比し、重厚で位情熱さをもったロマン的な第2楽章、そして、このソナタ最大のクライマックスを築き7拍子の運動性をもったトッカータ風の第3楽章、とそれぞれの楽章は、強い個性をもちながらも鮮やかに対比し、感情的にも統一されたものとなっている。これらの点から、《ピアノ、ソナタ第7番》は、戦争を含めたソヴィエトの暗く不安な時代を背景に、プロコフィエフの原点でもある律動するピアノの打楽器的な鋭い表現と、円熟期の特徴でもある深い叙情性の対照的な両面の作風をみることが出来る。演奏面においても、第1楽章での大きな2つの両極的要素、第2楽章と第3楽章との対照的な楽想の対比など、一方的でない幅の広い演奏表現が求められると言えるだろう。

●タッチを意識したピアノ指導～弱音のタッチに留意して～

伊藤 庸子

ピアノの指導者として生徒や学生の演奏を聴くとき、タッチに無頓着であることを感じる。ピティナの審査でも同様である。とりわけたいの演奏で、弱音を美しく響かせようという意識がまったく感じられないのが普通である。

自分もかつては同様であったと思う。音色について様々な指摘や指導をうけたが、その音色の幅を広げるタッチの方法については曖昧なままであった。ピアノにおけるタッチとは、他の楽器にたとえて言えば、バイオリンにおけるボーイングであり、管楽器における呼吸法やタンギングであるわけだから、楽器の演奏法を習う生徒・学生にとっては、けっして欠くことのできない技法である。にもかかわらず、その方法論となるといまだ効果的に指導されているとは言えないのではないか。

本レポートでは、フォルテピアノやクラヴィコードなどの古典鍵盤楽器の演奏を通して筆者が感得したタッチの方法と、それを生かした指導について報告する。

●ピアノ教育者の現状レポート

深井 尚子

このレポートは、深井尚子が、今まで実際に行ってきた、ピアノ教師のためのレッスンの現状をレポートしたものである。

ピアノ教師を育てることは、次の世代の音楽家を育てる土壌となり、大変重要なことと常々感じながらレッスンをしている。その現状では、ピアノ教師達の、心の叫びのような悩みを打ち明けられる場合が多い。その多数のピアノ教師のレッスンにより、日本音楽専門教育の問題点もたくさん聞かれた。

次世代の音楽環境を担うのは、ピアノ初心者を教える、町のピアノ教師である。彼らの悩みのタイプは、よく似ていることがわかってきた。それは、技術中心の教育の悪しき影響であった。ピアノ演奏から、本当の音楽を、そして芸術全般まで幅広い目で見たレッスンに植えていたのである。この問題は、内的なことであるため、なかなか表面に現れないため、多くのピアノ教師が、悩みを抱えて、教えていることがわかった。

その現状を報告し、私がどのようなレッスンをして、彼らの進歩をうながしたのかを、具体例とともにレポートした。